

文窓

ふみのまど・fumi no mado

神戸大学文学部 同窓会 文窓会

事務局：〒657-8501 神戸市灘区六甲町1-1

TEL&FAX 078-806-7207 (水曜日11時～16時)

<https://www.bunsokai.com/>

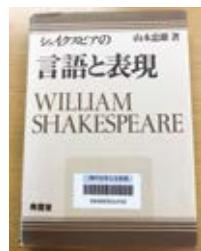
連絡用メール：bunsokai_renaku_toiawase@yahoo.co.jp

文学部：総務係 TEL 078-803-5591 FAX 078-803-5589

教務学生係 TEL 078-803-5595

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp>

20号
2022.9.30



文窓会ホームページのURLがシンプルになりました!
<https://www.bunsokai.com>

スマートフォンでも文窓会ホームページへ! 右のQRコードを読み取り、画面に出る指示に沿って操作するだけ。
スマートフォンはこちら▶▶▶

特集/私の20年
あの日・あれから・あの時代





学部長ごあいさつ

人文学研究科長・文学部長
長坂 一郎

学部長に着任してすでに1年余りが過ぎました。この間、新型コロナウイルスの感染状況がある程度改善され、その先にようやく光が見えてきたと思った矢先に、ロシアによるウクライナへの侵攻が始まってしまいました。

こうした先の見えない状況の中でも、文学部における学びの歩みを止めることはできません。今年に入り、卒業式、入学式、新入生ガイダンスなどは感染対策に配慮しながら通常に近い形で開催できました。昨年の「文窓」では「多くの授業はオンラインで開催され」と書きましたが、今年は逆に「多くの授業は対面で行われ」と書くことができる状況となっています。また、文窓会の方々にご協力いただき毎年開催している新入生歓迎茶話会も、今年は新入生のみなさんを文学部学舎に招いて実施することができました。神戸オックスフォード日本学プログラムの第10期生13名全員が4月に来日

できましたし、文学部生の海外留学も再開されています。まだいくつかの制限は残っていますが、クラブ活動なども少しづつ通常と同様の形式で行われるようになります。キャンパスがいつも通りの姿に戻りつつあります。

私もこの4月から本格的に対面授業を再開しています。最初は久しぶりの対面授業でペースが掴めなくて戸惑っていたのですが、最近はやっと「そういえばこんな感じだった」と感覚が戻ってきています。おそらく学生たちも同じ気持ちでいるのではないかと思います。そうした中で改めて認識したことは、大学という場所は単に授業に参加して知識を得るだけの場所ではなく、学生と教員が物理的に同じ空間を共有し、その中で経験するさまざまな出来事から知識を超えた多くのことを学ぶ場であり、それこそが大学という場に身を置くことの意義だということです。

文窓会の皆様には、こうした先の見えない状況の中でも継続してご支援を賜り、大変感謝しております。日常を回復しつつある学生たちに、これからも温かいご支援やご協力をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。



今年は神戸大学創立120周年

文窓会会长
武藤 美也子

会員のみなさま いかがお過ごしでしょうか。コロナ感染が始まって3年目。文学部ホームカミングデイは2020年には開催されず、去年はZOOM開催。今年はハイブリッド開催となります。皆様と対面でお話しできる日が待ち望れます。

去年第15代学長に藤沢正人氏(医学部)が就任され、異分野での「共創」と「協働」をスローガンに掲げられています。

そして今年は神戸大学創立120周年ということで、是非ともこの機会に神戸大学が一丸となったところを対外的に示したいと、そのためには校友会(KU-Alumni)の立ち上げが必要と、設立に向かって動いています。一丸とは卒業生組織である同窓会を中心として、在学生・留学生、保護者(育友会)、教職員(退職者含む)が一体となる全学組織ということです。もちろん単位同窓会が中心で、文窓会はそのまま存続します。東京大学の東大校友会をはじめ北海道大学校友会エルム、筑波大学校友会、岡山大学 Alumni、広島大学校友会(フェニックスクラブ)等に倣おうとするものです。ただ同窓会費に加えて校友会費の納入が必要となり、その会費に見合う成果を加入者に与えることができるのかが課題です。

我が母校神戸大学を誇りに思い、かつ神戸大学を応援していくという活気ある風土を作っていくための有意義な組織としての「校友会」設立に向けて、単位同窓会が中心になって現在審議中です。この会報誌を受け取られる時にはもう少し「校友会」の形が見えてきていることでしょう。

創立120周年の目玉は何と言っても医学部出身でノーベル賞受賞の山中伸弥氏の講演会です。日時は12月25日ポートピアホテルで開催。詳細は以下のホームページで随時更新されます。<https://www.kobe-u.ac.jp/120th/projects.html> この講演会の様子はYouTubeで動画配信が予定されています。どうぞご覧になってください。

彼は神大ではラグビー部所属でした。ラグビー部はお正月に毎年新年会を開くそうで、いつも参加なさるそうです。神大医学部付属病院の私の担当医もラグビー部でその方からの情報です。

今年は会報誌「文窓」が20号となります。そこで今年の特集のテーマは二十歳・20年等にまつわる事柄を中心に書いていただいている。自分の二十歳のときのこと、また卒業してからの20年のそれぞれの歩みのことなど、興味深い原稿が集まっています。自分の20年に合わせて読んでみてください。

まだまだ気が抜けませんがコロナが収束へと向かい、会員の皆様のご健康とご活躍を心から祈っております。今後とも文窓会への応援・ご協力をよろしくお願いします。

6月15日記

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第16回 文窓賞 2022年

学生レポートコンクール結果発表

対面授業が本格的に再開されましたが、ウィルスは自在に形を変え感染を拡げています。そんな中、応募された10作品はそれぞれ興味深いものでした。選考委員による審査の結果、受賞作として下記作品が選ばれました。

優秀賞(賞金5万円)

「『絵』ことば、読書について」 田中誠士(1回生)

エンデの『はてしない物語』を読み返した記憶から、読書とは何かを問う。その時々の自分のフィルターを通して、「絵」となって取り込まれ、血肉となり成長の糧になる。実益ではない。「絵」という概念で読書を語り、大学で学ぶ意味を追い求める。みずみずしい感性があふれる作品だ。世に蔓延る病巣から目をそらし、功利性や効率性を追い続ける現代の中で、なぜ文学を学ぶのか、考え続けてほしい。大きな意味があると思われる。

優秀賞(賞金5万円)

「皇帝の使者」 四ツ橋明里(ドイツ文学3回生)

興味を抱かせる書き出した。久しぶりの対面授業にとまどう筆者。自らの生き様について、心の中にあふれる葛藤を、カフカの『皇帝の使者』を引用しながら、紙面にぶつけている。悩み、考え、行動することで、使者が届けようとする「大切なメッセージ」が何なのか、少しずつ見えてくるのではないか。

優秀賞(賞金5万円)

「"Don't think. Just do."」 薄まなみ(英米文学3回生)

「トップガン」の続編を待ちにしていた筆者は、日米学生会議への参加で大きな影響を受けた。参加生たちとの討論や研修での学びから、やりたいことを見出した。それは、安全保障を深く勉強し、安全保障にかかる仕事だ。二年前、筆者が受賞した時に述べたことを思い出す。「彼女は、長い人生の旅で、いろんなものと遭遇しながら成長していく予感がする」。これからも文学部のmaverick(異端者)として、大いに羽ばたいてほしい。

佳 作(賞金1万円)

「学生ボランティアの意義と可能性」 中原幸子(国文学3回生)

「『現実逃避』も悪くない」 米谷実紗(国文学3回生)

選考委員長特別賞(賞金1万円)

「書くことによって映画を見る」 八坂隆広(芸術学博士課程前期課程2年)

既定の賞の獲得には至らなかったが、鋭い観察眼を持ち、独自の視点で書かれているこの作品に、選考委員長特別賞を与えたい。物事には様々な見方、視点があるのだと、凝り固まった右脳に少しカツを与えてくれた作品だ。

選考を終えて

今年は、テーマ、文章の構成、物を見る視点等において、個性的な作品が見られました。不安定な学生生活が続きますが、平常でないときの方が思考が広く、深くなるのかもしれません。

ある作家の言葉です。「書くこと…自分も含め、人間理解の一

端に迫るのに、これほど役に立つ分野はありません。作品は成長の道程のおおきなよすかとなるでしょう」書き続け、新たな発見をしてほしいと願っています。

(文責 選考委員長 西川京子)

選考委員

長坂一郎研究科長(心理学 教授) 白鳥義彦副研究科長(社会学 教授) 濱田麻矢副研究科長(中国・韓国文学 教授)
武藤美也子 三宅征彦 廣野幸夫 吉田浩次 中川伸子 中畑寛之 津田薫 梅村麦生 西川京子

特 集

私の20年～あの日・あれから・あの時代～

「戦後20年」の節目の年に

足立 靖彦(国文学専攻・1967年卒)

「文窓(ふみのまど)」20号を記念し、「戦後20年」の節目であった昭和40年の私について記してみたい。その年、私は文化総部傘下の「演劇研究会」の部長を務めることとなつた。学内クラブの限界でもあるのか、向かうべき方向も、どんな演劇をしたいのかさえも、部内の考えは種々雑多で強いて共通項を搜せば、「とにかく芝居がやりたい」ぐらいという、そんな「劇研」をどう引っ張つていけばよいのか、私は思案に暮れていた。

そうした折、国文科での指導教官であった永積安明教授からこんな話を伺つたのである。先生は沖縄の大学から中世文学に関する集中講義の依頼を受け、その準備の過程で当惑する事態に直面された。当時の沖縄は未だ米国の統治下にあり、沖縄へ行くには米国の許可を必要とした。逆に沖縄の学生が神戸大にも何人か入学してきていたが、彼らは「留学生」の扱いを甘受しなければならないという、そんな時代であった。そうした状況下において、先生の入国申請は米国にとって好ましからざる人物と邪推されたのでもあろうか、理不尽にも却下されたのである。それが戦後20年も経た我が国の日米関係における哀しい「現実」であつたのだ。

そのような現実を前にして、私は劇研の上演戯曲として、戦後20年の被爆地長崎をテーマとした宮本研の反戦劇「ザ・パイロット」を推し、神戸国際会館で上演する運びとなつた。ここでは戯曲の内容紹介は割愛し、上演に際しての二つのエピソード(それは私にとっては正に「事件」そのものであった。)を述べるに留めたい。

最初の「事件」は、国際会館の大道具係さんと我が劇研の舞台装置責任者との間でトラブルが生じ、神戸大の舞台装置は制作できないとヘソを曲げられてしまった事である。

困り果てた私は、一升瓶をブラ下げて謝罪に出向いた。そして幸いにも事なきを得た。

もう一つは、国内での上演権を得ていた俳優座さんから、我々の上演にクレームがついたのである。我々も作者の宮本研さんから上演許可を頂いていたのだが、拙いことに神戸初演が日程的に我々の方が早くな

ってしまい、しかも上演する劇場も同じ神戸国際会館とあっては、そのクレームは当然といえば当然の事ではあった。しかしそれも最終的には俳優座さんが譲歩して下さり、何とかクリアすることができた。

かくして上演出来た劇研の「ザ・パイロット」の出来栄えであるが、それは言わぬが花であるとしておこう。余談ながら、私が演じた三菱造船の臨時工である和平(名前自体も大きな意味を持たれている)役は、俳優座公演では本年3月に81歳で逝去された山本圭さんが、そのナイーブな青年像をものの見事に演じられていた。また、劇研の公演で和平の恋人役あぐりで私の相手役を演じてくれた小林(旧姓・小柳)絹代さん(昭和42年・英文科卒)も、2019年の晩秋、コロナ前の私の最後の朗読公演を観に来て下さった翌週に急逝されている。改めてご冥福をお祈りしたい。

この上演である種の手応えを感じ取れた私は、演劇を一から学び直したいと考え、スタニスラフスキーシステムに興味を覚えていった。そしてモスクワ芸術座の重要レパートリーであるゴーリキーの「どん底」に挑んでみたくなつたのである。しかし、この挑戦は見事な失敗に終つた。何故ならレパートリー劇団(集団演技)の為に書かれたこの戯曲を上演するには、何よりもアンサンブルが要求され、緻密な演出が不可欠なのだ。私の稚拙な演出力では到底歯が立つ相手ではなかつたのである。そんな私を支えてくれた仲間達に感謝する他はないと今更ながら思う。この「どん底」の舞台となる木賃宿の親父役も私が演じたのだが、その妻のワシリーサ役は同窓会の現会長である武藤(旧姓・玉田)美也子さんであったことを付記しておきたい。

さらに次の公演として、スペイン内乱以降のロンドン・イーストエンドの貧民街にあるユダヤ人コミュニスト一家を描いたA・ウエスカーの「大麦入りのチキンスープ」に取り組むことになるのだが、それを記す余裕はもう残されてはいない。

かくして、「私の戦後20年」は未消化のままに終わりを告げていった。



29年間勤めた会社を退職、そこから歩んだ20年

広尾(八十島)克子

(哲学科芸術学専攻・1971年卒)

私は大学紛争さ中の1971年に卒業、旅行会社に就職しました。活況を呈していく海外旅行部門で29年間勤務し、2000年に退職。認知症をわざらった母に寄り添うためでしたが、悔いのない幸せな会社人生だったと思います。

それからは「母を支えることが新しい仕事」と割り切って臨んだのですが、それがどんなことなのか…分かってなかつたのです。姉と2人で母を見たので、世にいう壮絶な介護ではありません。それでも認知症は目が離せない病気です。ず～と母の言動に振り回され予定が立たず時間が読めず、自由にできる時空間の見極めができない。つまり拘束感に苛まれることになつたのです。思い通りに仕事をしてきた身として、選べない決められない状態を受け入れるという「切り替え」は中々辛いものでした。週2回嫌がるデイサービスになだめすかして送り出し、やっと自分の時間が持ててホッとしたものでした。

それでも、母と過ごした時間は何にも代え難いものだったと今は思います。家を出ても親は元気あたりまえ、と特段気にすることもなく香気にしていた私。そんななか父が急死し、母が認知症に。青天の霹靂で、私のライフプランも変えざるを得なくなり…。けれども今となつては、母の晩年に寄り添えたことがかけがえのない心の癒しになっています。2010年に亡くなるまでの10年間で、母は「本当に大切なことは何か」を教えてくれました。それは「真摯に人と向き合うこと」でした。

最近、老々介護、8050問題など閉鎖家庭の問題がマスコミに取り上げられます。確かに油断すると孤立しがち。閉塞感も伴います。私は抵抗し、母を看ながら可能な限り外と繋がることにしました。時間を作つて実家近くの陶芸教室に通い、自治体主催の日本語ボランティアに関わり、姉に母を任せられる日は自宅近くの関学の聴講生として様々な講義を受講。ひとことで言えば、すべて気晴らしでした。退職したことで社会との関りが無くなることに、必死で抗つたのです。結果、それまでの会社勤めでは出会えなかつたような人々に出会い、知り得なかつたであろう知識を得ることが出来ました。それは財産となり、人生オオマルです。仕事外の

時間を美食や旅行に費やしていたそれまでの行動が、急に浅はかな白けたものに思えて後悔させたものです。多忙だからと自分を正当化し、いかに視野を狭めていたか…遅かつたけど気付かされました。

母を送つた翌年に東北大震災が起つり、主人とボランティアに参加しました。泥かきなどの力仕事は若い人に、私たちは被災者のケアにとの振り分け。そこで目を覆いたくなる惨状の中でもしなやかで逞しい人々に遭遇し、価値観が覆される経験をしたのです。じつとしておれず、役に立たないことを自覚しながらも、5年間被災地に通いました。自己満足ですが「あなたを忘れない」と記憶し続けるためです。

「母を見る仕事」がなくなり無為に過ごすことには堪えられず、2013年関学の大学院に入りました。選んだのは、関心事である「カニの食文化」を学ぶに近いと考えた社会学研究科です。「えーカニ？？」となかなか先生方に理解してもらえず大変でしたが。でもフィールドワークの手法、先行研究、テーマ作成、論文構成などを指導いただき、「カニを中心に魚食文化を考える」というライフワークを見つけることができました。修士論文は提出したもの、博士論文の敷居は高く出版に向かう方向転換し、2019年に『カニという道楽—ズワイガニと日本人の物語』(西日本出版社)を刊行しました。気付けば70才。朝日新聞の書評などで取り上げて頂き、ひと仕事やつた達成感があります。

大学院に入った頃に、学生時代から触りたいと思っていた沖縄楽器「三線」の教室にも通い出しました。音感リズム感が疎く、全く上達しませんが楽しいものです。沖縄の歴史・文化、復帰50年の今をもっと知りたくなり関心は広がる一方。下町の三線教室では大阪弁とウチナーチが飛び交い、ガンの体験を語り合う元気印のおばちゃんにも巡り合い、世界は広がります。

コロナ禍で外出自粛が要請され、2年ほどまならない時間を過ごすことになつてしましましたが、ZOOMなど新しい経験もできたとポジティブに捉えています。退職して20年+2年経ちました。何にでも首を突っ込みながら、したたかに次の20年に臨みたいものです。さてどうなることでしょう！



学生生活の思い出

坪田 正信(社会学専攻・1968年卒)

■専門課程の選択

神戸大学文学部には昭和39年に入学。翌年9月教養課程を無事終了、そして専門課程へ進級。当時の日本は、昭和35年の日米安保条約締結を機に、最早、戦後は終わったとの風潮が。また、景気も東京オリンピックの特需と30年代の高度成長の反動もありやや停滞気味であったが昭和40年度を境に上昇期に入り、いわゆる「いざなぎ景気」のご時世。その後も、戦後のベビーブーム世代が成人となり団塊の世代が登場、新しい価値観の消費行動、文化行動が社会をリードする時代いわゆる「大衆社会時代」の前触れ。そんな世相も反映してか、社会学は学問として大いに脚光を浴びていました。いわゆる「大衆社会論」の流行—欧米ではリースマンの「孤独な群衆」やマンハイムの「変革期における人間と社会」等の研究発表、わが国でも清水幾太郎・北川隆吉等々著名な研究者が続出。私もその夏、サークルの同僚と長野県の学生村に約2週間投宿、「大衆社会論」に関する文献を多読、関心度を高め社会学科を専攻。

■ゼミの選択と卒論のテーマ

社会学科には、堀喜望先生・金沢実先生・杉之原寿一先生・長谷川善計先生の4人の先生方がいらっしゃいました。堀先生はジンメルや文化人類学研究の第一人者。金沢先生は理論社会学を専門としウェーバーやマンハイム研究の第一人者。杉之原先生は部落問題に熟知また社会調査を核とし実証的な研究方法には定評あり。どのゼミも魅力的でしたが、社会学科専攻の理由でもあった「大衆社会論」の研究。特に変動期の農村社会に育った私には、団塊の世代による新しい価値観・消費行動が及ぼす旧来の共同体や家族関係への影響力についての研究は重大な関心事。そこで、堀先生の専門分野である「文化人類学」に改めて注目、ゼミは堀先生に師事することに決定。それから、堀先生の研究論文を初め、当時の著名な文化人類学者石田英一郎氏・石毛直道氏等の著作物にも触れ文化人類学の面白さを再認識。なかでも、今和次郎氏の「考現学」や宮本常一氏・柳田國雄氏の民俗学に興味を持つ。結果卒論のテーマは、私個人の体験に基づく「経済の発展等に伴う村落共同体の組織及び意識の崩壊・衰退の現状の解明」に決定。テーマ決定後は、先の民俗学の著書を初め、「村落共同体の行事や組織そして実生活における住民の行動・意識変化の実態」に関する研究論文を読み漁る。特に、有賀喜左衛門氏・福武直氏・松原治郎氏等の発表論文から随分示唆を受ける。※卒論は、淡路島の農村共同体での個別面接と役場での資料収集を実施・作成。

■日常生活

阪急今津線門徒厄神駅から徒歩で約15分程

度、長閑な田園地帯の面影を残した住宅街にある下宿屋さんが私の日常生活の拠点。洗濯と掃除は自分でしなければならないが朝夕の食事付・入浴毎日可、部屋も4畳半と手頃な広さでの暮らしは単身生活初心者の私にとっては手頃な生活環境。狭いながらも我が家か一特別奨学資金での生活は、経済的な余裕はなかったが「学生の本分は勉学」との意気込みで「節約を心掛けながらの生活」。大学へは、電車と徒步で小一時間、また大阪や神戸へも特急を利用すれば所要時間は2~30分と交通便の点では満点。講義のある日は勿論、休講の日も通学定期を利用してほぼ毎日登校。暇つぶしと専門書の読書で図書室に入りびたり。また、昼食は生協の学食で済まし節約。文学部学舎前の広場から眺める大阪湾、神戸の街並みの絶景を楽しむ。時には、三宮まで足を延ばし三宮センター街と元町通りをぶらぶら。行く先は漢口堂か古本屋の後藤書店へ学術書や好きな作家の本探し。帰りがけには喫茶カンヌ(曜日毎に異なる焼寸ができることで有名)や音楽喫茶エリーゼ?でのんびり。そして、映画好きだったので、月に1~2度は三ノ宮駅近くのビッグ劇場や元映へATG系の映画や洋画鑑賞で贅沢感?を味わう。日曜日は洗濯や部屋の掃除、それが終わったら近くの仁川ピクニックセンターから甲山の山頂までの散歩で運動不足の解消と行楽気分を楽しむ。また、雨の日は読書に勤しむ。大江健三郎氏の初期作品集や「闇市派」野坂昭如氏の「火垂るの墓」、「アメリカひじき」、吉川幸次郎氏の愛弟子でもあった高橋和巳氏の作品—「邪宗門」や「悲の器」—等々を愛読。



■学生時代の総括

慣れない都会での初めての一人暮らし、また、経済的には余裕のない学生生活で毎日が真剣勝負の4年間—工夫と努力の試行錯誤の連続—。何とか卒業することができ、「有意義な青春時代」を送れたと総括・自己満足。そんな思い出一杯の2年半の文学部時代を振り返り、「当時20歳の私」と「現在76歳の私」の対照比較。反省の意も含めお互いの未来と過去に、アドバイス&エール?の交換を。

	20~22歳の大学生へ	76歳の卒業生へ	20~22歳の大学生へ	76歳の卒業生へ
①	未来へ投資(希望)	過去の清算(愚痴)	⑥ GOLDエイジ	COLDエイジ
②	青春を咆哮する	思い出が彷徨する	⑦ 前途洋々	前途多難
③	ゼロからスタート	ゼロへのスタート	⑧ ハートがドキドキ	心臓がドキドキ
④	頑張ろうね	頑張ったね	⑨ 強固な意思が必要	優しい医師が必要
⑤	加算の人生/これから	引算の人生/いまさら	⑩ お洒落が好き	馴染みが好き

20歳のころ

梅村 麦生(社会学専修・2009年卒)

みなさま、初めまして。2021年10月に文学部社会学専修の講師として着任いたしました梅村麦生です。

私が20歳の年を迎えたのは、いまから17年前、神戸大学文学部に入学した2005年のことになります。社会的な出来事でいうと、尼崎でJRの脱線事故があつた年です。あとインターネットで検索すると、愛知万博が開かれた年でもあつたようです(私は愛知県の出身ですが、行きました)。そのころ私は、いったい何をしていたのでしょうか。

いまとのつながりでいうと、当時はまだ1回生で、各専修に分かれる前のことでした。社会学で覚えているのは、岩崎信彦先生の講義です。ごく断片的な記憶ですが、一つは全学共通の教養の授業で、期末レポートの課題がマックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、フェルディナント・テンニース『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』、あともう1冊別の誰かの著作、その3冊の中から一つ選んで読んで書け、というものだったこと。そのなかで私は、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』を選びました。そのころ杉之原壽一訳の岩波文庫版が品切れで、大倉山の神戸市立中央図書館で借りた気がします。そしてもう一つ、文学部の複数専修によるオムニバス授業で、南太平洋の島々のクラ交換のビデオを流していたこと。それから17年後、同じオムニバス授業の社会学回の半分を、私が担当することになりました(残り半分のご担当は、平井晶子先生)。

大学外のこと覚えてるのは、日雇いアルバイトと、本屋によく行っていたことです。そう、いたって月並みな文学部生でした。

日雇いアルバイトといえば、当時は不況の底?で、“派遣アルバイト”というものが最盛期のころでした。だいたいフリーペーパーを見て、三宮や大阪梅田のビル(や、二宮の裏通りにある小さな事務所にも)に入っている大小さまざまな派遣会社に登録し、あちこちの倉庫や商業施設で搬出入やピッキング、引っ越し補助などをしていました。北丹地方の綾部市にも、引っ越しトラックの荷台に乗せられて行き来しました(ちなみに、“派遣アルバイト”という形態は、私が2回生になるころには大手企業が一斉撤退され、

衰退していったように思います)。

そして本屋というと、やはりジュンク堂書店です。三宮センター街の店舗も行きましたが、三宮駅東側のダイエーが入っているビルの上階にある店舗によく行きました。1回生のとき阪急春日野道駅付近に引っ越したため、そこから自転車で通いました。そのダイエーのビルのとなりには、“サンパル”というビルがあり、そこに入っていたMANYO書店という大きな古書店にも、本当によく通いました。MANYO書店は、マンガ、小説、新書、一般書から(CDやDVDも?)、専門書、洋書までを取り揃えている巨大な古書店で、マンガや小説を始めとして、いろいろなジャンルの古書を買いました。いちばんのインパクトは、いしいひさいち『ドーナツブックス』。ここで買い揃えた気がします。まさにバイト君の世界。

そして“サンパル”には他にも古書店や、下の階には文具店や飲食店、また南側の神戸市勤労会館には三宮図書館が入っていましたと、このあたりの区画は当時の私にとって文化的生活のライフラインでした(文字通りのライフラインは大安亭市場だったかもしれません)。この一帯はいまや再開発の対象になり、2022年中に“サンパル”も勤労会館も取り壊され、その後は高層ビルが立つようです。

とりとめのない思い出の最後に。いままた注目されるべくして注目されている、スヴェトラーナ・アレクシエヴィチ『戦争は女の顔をしていない』(三浦みどり訳、岩波現代文庫)の序文からの引用をもって、むすびに代えたいと思います。

「回顧とは、起きたことを、そしてあとかたもなく消えた現実を冷静に語り直すということではなく、時間を戻して、過去を新たに生み直すこと。語る人々は、同時に創造し、自分の人生を『書いて』いる。『書き加え』たり『書き直し』たりもする。そこを注意しなければならない。……人間は年をとつくると、今まで生きてきたことは受け入れて、去っていくときの準備をしようとする。……過去を振り返ると、ただ語るだけではなく、ことの本質に迫りたくなってくる。何のために、こんな事が自分たちの身に起きたのかという問いに答えを見つけたくなる」。



20年後の私

西川 京子(西洋史専攻・1969年卒)

今年の元旦に75歳の誕生日を迎えた私、20年後には95歳になる。もし、その時生きていたら、そして、また頭が動いていたら、眺めたい風景がある。

20年後の2042年、香港は中国に完全一体化されるまで5年と迫っている。かつて、香港のビクトリアピークから見た夜景、宝石箱をひっくり返したようにキラキラ輝いていた香港の街はどうなっているだろう。

もうすでにすっかり中国に飲み込まれて辺境の片田舎になっているのか、それとも、「いたずらっ子」のように自由で活気にあふれた香港の魅力が残っているだろうか?

公認会計士の私は、1990年に香港の提携国際会計事務所に出向し、2000年まで11年を過ごした。香港は私の第二の故郷、そこで触れ合った同僚や友人はかけがえのない生涯の友となっている。

私は、監査法人を退職した頃から短編小説やエッセイを綴り始めた。「香港の自由の行方」は、テーマの大きな柱、20年後に人生最後のエッセイを書けたら最高だ。

33歳で離婚後、畠違いの勉強を始め、公認会計士になつた。

1980年代後半の日本は円高が進み、製造業は海外に製造拠点を求めた。金余りの企業、個人は投資機会を求めて海外の不動産を買い漁った。我が監査法人のクライアント、ヤオハンは海外展開を加速し、税率が低く、規制の少ない香港に、持株会社を移すことを計画していた。提携先、Coopers & Lybrand(現PwC)香港事務所から日本人会計士の補充が強く求められた。英語もろくに話せないが手を挙げた。

中国返還後の香港はどうなる? 野次馬根性が顔を出す。文学部での専攻は西洋史、南アフリカにおける英國帝国主義を卒論のテーマとした。テニスと遊びに夢中だった。又、卒業間近は大学紛争で学部は封鎖されていた。しかし、頭の片隅に学んだことが残っていた。

返還に関し、鄧小平とサッチャー首相の間で合意がなされた。香港は、1997年7月1日に中国に返還されるが、50年間は「一国二制度」を採用。軍事、外交を除き、香港は自由で規制の少ない現制度が継続する。

1990年1月の赴任時、返還前の香港は活気に溢れ、日々変化しているようだった。中国ビジネスの拡大を視野に香港に進出する外国企業、返還後の香港を恐れ海外に移住する人々。香港人の不安をよそに香港経済は成長していた。

返還の1997年に私は50歳になった。返還当日は、日本人俱楽部でパーティーを開き、香港人の同僚や家族と共に、ビクトリア湾に打ち上げられる祝賀の花火を眺めた。

文革で中国から逃げてきた人々等様々な事態を潜り抜け、英國植民地下で自由都市としてユニークな存在を示してきた。今後もカメレオンのように、柔軟に対応していくだろう。

中国経済は発展し、多くのビジネスマンや留学生が海外で仕事をし、学んでいる。そこで自由の心地よさを実感し、徐々に中国自体が変わっていくだろう。そう望んでいた。

しかし、期待とは逆方向に事態は動いている。2014年に選挙の民主化を求めて反政府デモが勃発した。傘で催涙弾を防いだ活動は「雨傘革命」と呼ばれた。

2019年に「逃亡犯条例」改正案が提出された。反体

制派を容疑者として中国本土に引き渡すことが可能となる。6月9日は100万人を超える人々が反対の声を上げデモ行進した。10月には法案は撤回され廃案となつたが、活動家は要求を高め、行動は過激化していった。

香港政府は過激派の活動を抑えきれず、中国全人代が「香港国家安全維持法」を制定した。

中国政府への批判的姿勢を貫く日刊紙「林檎日報」の創設者、ジミー・ライが逮捕、拘留され、「林檎日報」は2021年6月24日をもって廃刊に追い込まれた。

彼は12歳で単独中国から香港に密航した。不法滞在で仕事をしながら力をつけ、アパレルチェーン「ジョルダーノ」を創業し、天安門事件を機にメディア事業にも進出した。

「着の身着のまま密航した自分に香港がなにを与えてくれたか。自由な天地はありがたく得難いものだ。自由を守るために、戦いをやめるつもりはない」

「国安法」の制定に欧米の報道機関は強い懸念を示した。

「一国二制度は形骸化、自由がなくなっていく中、香港市民は戸惑いの色を隠せません」

なにより自由を愛する香港人は、皆、「国安法」に憤っているだろうと思った。そうではなかった。親しい香港の友人、アンからの手紙は衝撃だった。「ヨーロ、『国安法』の制定は、香港を安全で平和な状態に戻すためには仕方がなかったのよ。香港人の多くは新法を容認しているわ。過激派は暴力をふるい、街を破壊する犯罪者以外のなにものでもない。日本を含め、欧米の報道は非常にバイヤスがかかり、実情を報道していない」

20年以上香港に住み、仕事を続けている日本人の友人も悲しそうだった。

「香港は昔のようではなくなってしまった。親中派と反中派に分断されている」

親中派といつても、中国の政策に諸手を挙げる人はごく少数だろう。経済人にとっては、中国は大きな市場かつビジネスパートナー、仕事さえ自由にできれば政治は二の次だろう。

暴力は絶対ダメ、と友人たちが言った。香港を壊し続ける過激派の行動より、「国安法」を受け入れ、日々の生活が平穏に送れることが何より肝心だと。

香港には元々普通選挙による民主政治なんてなかったが、人々はのびのびと羽を広げて生活していた。「選挙権なんてどうでもいい、自由さえあれば」、香港人のボスの口癖だった。

自由って何だろう? テクノロジーの発展によって、良くも悪くも世界は急速に変わるだろう。安全や効率化と引き換えに社会は管理・監視されていく。社会の在りよう伴って、自由や幸福についての考え方・感じ方も変わらだろう。

退職し、時間ができて初めて学ぶこと、知ること、考えることの楽しさを知った。最後のエッセイの準備を始めよう。身体のあちこちにガタがきて、満足に動けなくなつても好奇心がある限り、面白い時を過ごせそうだ。歴史の学び直しの始まりだ。



阪神・淡路大震災から一万日、人文学研究科地域連携センター発足から二〇年

神戸大学理事・副学長

奥村 弘(国史学専攻・1983年卒)

今年、六月三日、阪神・淡路大震災から一万日を迎えた。昨年からサンテレビ・人文学研究科地域連携センター・附属図書館震災文庫の三者が共同して、同社の災害報道の素材となった阪神・淡路大震災関連映像の公開事業を進めている。この期にあわせて、六五件の新たな映像が震災文庫デジタルアーカイブで公開されることになった。

建物が大きく崩れた西市民病院で救助の様子や、北淡町(現在淡路市)での生き埋めになつた方の救出作業などの映像からは、私たちが、テレビでは見ることがなかつた大震災のリアルな実像が映し出されている。

映像をどのような基準で公開するのか。大規模災害の記憶を次世代に引き継ぎ、減災・防災の研究に生かすために、私たち三者は、研究会を継続的に開催してきた。地域連携センターからは、私と吉川圭太講師、佐々木和子学術研究員が参加、画像を確認し、「肖像権ガイドライン」を定めて公開を進めていった。

このような形での映像のガイドライン作成は日本ではじめてのものであり、作業は大変であったが、報道機関・研究者・図書館の三者で基準について考え、公開に関する思いを深めることはとても楽しいものでもあった。すこし大げさになるかもしれないが、社会の中で異なる役割をもつ者が、具体的な素材をとおして社会に発信していく作業を共有していく、このような取り組み自身が人文科学の研究者として、文化を創るということを実感させるものでもあったからである。

今考えると、私にとって大震災からの一万日は、このような出来事の連続であった。私は、神戸大学文学部に一九七九年に入学し、日本史を専攻、引き続き大学院でも学んだ。その後京都大学人文科学研究所助手を経て、教員として神戸大学に赴任したのは一九九一年で、大震災はその五年後に発生した。最初の五年間と現在に至る教員生活は、その意味では大きく違うものとなっている。

大学院以来、私の主要な研究関心は、身分制的な近世社会から地域社会がどのようにして形成されてくるのかという視点から、近代日本の形成過程の特質を明らかにしようとするところにある。大

学院生の頃から、姫路市や赤穂市、相生市を研究フィールドにして史料調査を行い、地域の歴史資料からこの問題を考え、またそこで生まれた研究成果を自治体史を執筆することで、地域の方々に還元してきた。



叙述を通して社会に成果を還元するこのような手法は、「書き手」としての研究者と「読み手」としての市民という関係を基本とする。大震災まで、私自身も研究者とはこのような手法を取るものであると考えてきた。しかしながら、大震災後、滅失の危機にある被災地の歴史資料を保全し、地域の記憶や災害の記憶をどう継承していくのかという課題に直面した時、この考え方のみでは十分対応できない事態に直面した。

地域の歴史資料の多くは地域の様々な担い手が、社会の中で継承してきたものであり、地域社会の文化的基盤の基礎をなすものであったからである。歴史資料を地域住民が主体となって継承することができなくなれば、そもそも地域の歴史研究も不可能となる。実は研究者は、その膨大な蓄積の一部を活用させていただいているのである。地域の歴史資料を歴史遺産として継承できる文化を創っていくこと、それが可能な新たな市民社会の構築に寄与することも専門研究者の重要な役割であることに気づかされた。

このような気づきは私だけのものではない。人文学研究科地域連携センターは、阪神・淡路大震災を経験した研究者たちが、専門研究者の養成や市民との関わり方を含めて、歴史学さらには人文科学研究のあり方全体を変えていくこうとする中で生まれた。センター発足から二〇年がたったが、私たちはなお模索の途中にある。

このように書くと堅苦しいように思われるかもしれないが、地域連携センターの活動を通して地域の方々や他分野の研究者や専門家と接することは、とても楽しい出会いの場である。また地域の歴史文化が継承される現場に立ち会うことで、歴史研究の役割を実感できる場でもある。

コロナ前には、地域連携センターでは毎夏朝来市で、地元の方々や学生さんと史料調査を行い、夜には但馬肉でのバーベキューを開催、そこでは楽しい出会いが次々生まれた。コロナで難しいところはあるのだが、なんとか再開させたいと考えている。

最近20年の気になることはば

鈴木 義和(国文学専攻・1980年卒)

最近20年ほどでよく使われるようになったことばで、気に入らないことばをいくつか取り上げて感想を書いてみたい。私の専門は国語学だが、ここでは学問的な厳密さなどは無視させていただく。

スピード感を持って

この20年ほどで大いに勢力を拡大したことばのうさんくささについては、ネットその他で多くの批判が出ており、私もまったくそのとおりだと思う。「スピード感を持って／もって」を国立国語研究所の現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ-NT)で検索すると2002年の1例しかヒットしない。このコーパスのデータは2008年までなのだが、以前からよく使われていたことばでないことは推測できる。国会会議検索システムで検索すると、初出は1997年で、それからしばらく年2~5件程度だったのが、2002年に31件に急増し、以降順調に増えていて2021年には100件を軽く超えている。グーグル検索で期間別に検索してみると、最近ではネットの企業PRなどでも盛んに用いられており、いかがわしいと思わない人がたくさんいることに驚かされる。

見える化

トヨタ自動車が作ったことばで、1998年の岡本涉氏の「生産保全活動の実態の見える化」という論文あたりから一般でも使われるようになつたらしい。BCCWJ-NTでは初出が2002年、国会会議録での初出は2006年であり、そのころにはすっかり定着して用いられているように見受けられる。最初にこのことばに込められた意味は評価できるし、「見ることができる」「自然に目に入る」という意味を併せ持つ「見える」という語を使うことによって可能に片寄る「可視化」などとは違う意味を持たせるというはとてもうまいと思う。しかし、何か違和感がある。たぶんそれは和語に「化」を付けるというふつうは使われない用法のせいだろう。

結論ありき

このような「ありき」の使い方については、辞書にも記載があり、ネットのことばの解説でも多く取り上げられてすっかり定着したものとなっているようである。「結論ありき」のBCCWJ-NTでの初出は2002年であるが、国会会議録の初出は1977年で

ある。また、「～税ありき」の国会会議録の初出は1973年であつて、ずいぶん以前から使われていたことが分かる。しかし、国会会議録やグーグル検索の期間別のヒット件数から見ても、この20年で非常に多く使われるようになったことは間違いない。このことばについては、なぜかことばの乱れなどといった視点からの批判も見られないようなのだが、私はけつて使おうと思わない。と言うのは、本来古語の「き」は「過去においてそれが存在した」ということに加えて「現在はそれは存在しない」という意味を持っており、問題の「ありき」の「過去の決定が現在、未来において変更されることなく維持される」という意味はそれとあい反するものだからである。わざわざ意味の悪しき改変をしてまで古語を復活させる理由が私にはまったく理解できない。



しっかりした味

BCCW-NTでの初出は2002年、グーグル検索で期間別に見ても2000年代に入ってから急激に用例数を増やしているように見える。「味」に「しっかり」という形容を使うのも少し違和感があるが、気にくわないので、このことばが多くの場合実質的には「塩味がきいている」という意味で使われていることである。日本人の年間の塩分摂取量データを見ると年々その量を減らしており、それとは矛盾するようであるが、塩からい食べ物への嗜好は実は強くなっているのではないだろうか。テレビでカップラーメンを食べるシーンではほとんどの場合お湯の量が定量より1cmほど少なく、実際お湯の量が少なくした方がおいしいと言う人がたくさんいる。定量より多めにお湯を入れ、カップ焼きそばのソースをかなり残す私には信じられないことである。同じようなことは、ここ20年ほどでよく聞くようになった「ソースをかけなくてもおいしい」ということばにも表れていると思う。「フランス料理はソースが決めて」などと言われるようにソースにはソースのおいしさがあるので、それをかけないことが自慢になるとは思えないのだが、要は「ソースが無くてもおいしいくらい塩味がきいている」ということなのだろう。どちらのことばも、塩からいもの好きをごまかした言い回しのように思えてならない。

(元文学部教授・2021年に退職されました)

私の20歳の頃の社会的背景と、私はその中で何を思い何をしてきたか？

加島 史健(哲学専攻・1990年卒)

わたくしは、昭和61（1986）年4月にこの神戸大学文学部に入学し、平成2（1990）年3月卒業いたしました。卒業後から現在まで、大阪市内にある私立の高等学校で英語の専任教諭をいたしております。自分の二十歳前後の頃は、一つの時代がまさに終焉を迎えるとする、大きな歴史の転換期であったと言えます。1988年には昭和天皇の御病気が公表され、その翌年の1月7日に崩御なされて昭和が終わりました。そして平成へと改元されたまさにその年に、ベルリンの壁が崩壊し、第二次世界大戦後の世界の枠組みを決定していた東西冷戦も終わつたのです。『愚管抄』を著した天台座主・慈円僧正ではありませぬが、歴史を動かす「道理」というものとその歴史の担い手である人間の本性というものについて深く思いを廻らせていました自分にとって、この一連の出来事は至極当然のこととして受け止め、とりたてて大きな驚きもありませんでした。

しかしその頃論壇を賑わした、冷戦後の世界についてヘーゲルの歴史哲学を援用して論じたフランシス・フクヤマ氏の『歴史の終焉』という論考には全く共感できませんでした。わたくしは当時ショーペンハウエルの考えに共感していて、どちらかというと人間に対してペシミスティックなものの見方をしておりました。それゆえ、誤解があつたかもしれませんのが、フクヤマ氏の未来への楽観的な見通しに対して強い疑念を感じました。やはり人間とは、おそらくいつまでも無明のままであろうから、そんな明るい未来を期待する見方には与することはできないなあと。

経済については、世はバブル経済の真っ最中でした。世の中全体がイケイケムードに満ちていて、こちらの雰囲気にもわたくしは全く馴染めませんでした。むしろこんなありさまで本当にいいのだろうかとさえ思いました。まだ二十歳くらいの、世の中のこともよく知らない子供同然のはずなのに、世間の多くのいい歳をした大人たちが、マネーゲームに狂奔する姿に強い違和感を覚えました。

一つには、これらは釈尊が悟られた世界の真実・世界の真の有りよう（諸法実相）に合致しない振る舞いだと思われたから。

『法華經』にある言葉「三界は安きこと無し、なお火宅の如し」という真理に全く反していると。投機や株に血眼になっている大人たちの姿に、経典の中で説かれている、火事になっている家の中で迫り来る危険・危機にも全然気づかず玩具遊びに我を忘れて夢中になっている子供たちの姿を重ね合わせておりました。



二つには、その頃世界の歴史について自分で色々読んでいたため、オランダの「チューリップ投機事件」、イギリスの「南海泡沫会社事件」、フランスの「ジョン・ローによるミシシッピ会社破綻事件」やらアメリカの「20世紀世界恐慌」などについてよく知っていました。だから永遠に土地や株の値段が上がり続け、好景気が終わることなくいつまでも続くなんてことは、世の道理に反することであり、それゆえそんなことは決してありえないことだと思っておりました。

三つには、当時『大岡越前』などの時代劇をよく見ていたのですが、そこで描かれている「庶民の智慧」・「庶民の意地と矜持」というものに深く感化されていて、「濡れ手で粟」のような生き方は、人としての真っ当な生き方に反するものだと感じましたので。

そのような訳で、世の狂熱とは距離を置いて、冷めた眼で世の中を観じてきましたが、そんな中、今では考えられないことですが、就職活動期には自分のような者の所にも、様々な業種の企業から山のような会社案内が送り届けられてきました。当時の花形は、証券会社と銀行で、猫も杓子もみなその業界に就職したがっておりました。しかし自分は、その業種にも企業勤めにも性格的に全然向いていないとよく理解していたので、まだ自分にもできるかもしれないと思われた業界へと進むことにしました。以上の経験は、現在生徒の進路指導で生かされています。世の中の動向や人気などには左右されずに自分の適性・自分のやりたいこと・好きなことを最も優先させるようにと。以上、今の自分を形作ってくれたこの大学に在学していた頃のことを、拙いながらもお話しさせていただきました。

知・人・共創と協働



KOBE UNIVERSITY

「神戸大学創立120周年を祝って」

web上の創立120周年記念事業特設サイトには、国内外から多数の「お祝いのメッセージ」が寄せられています。その中から文学部卒業生の方々の祝辞をご紹介します。

富士海外旅行(株) 元専務取締役

守本 保彦 様

(文理学部 文科(哲学科)専攻・1953年卒)

卒寿のこえを聞いて学生時代を振り返るのはまた感慨深いものがある。

1期生の我々は5月入学式、9月開講という変則に始まって、校舎は住吉学舎(旧御影師範)、六甲台、御影学舎を転々とした。1953年の卒業時は旧制の最後と新制の最初が重なり大変な就職難に見舞われた。入学時78名だった文科の学生数が卒業したのは38名だったというのはその影響が多分にあったかもしれない。

だがそれなりに充実した4年間だった。学業もさることながら部活やアルバイトにも精を出した。でもそれが後の人生に大きな影響をあたえている。

今は学舎も学ぶ環境も素晴らしいものになったと聞いている。現役の皆さんは新型コロナの困難を乗り越えて、教養豊かな国際人として世に出ることを期待している。



文窓会会長

武藤(玉田)美也子 様

(国文学専攻・1968年卒)

創立120周年おめでとうございます。私は文学部16回生として1964年に入学しました。そして約半世紀後に文学部同窓会会长として神戸大学に帰ってきました。そのお陰で、大学のスタッフ達との交流も広がり新たなる神戸大学との付き合いが始まりました。半世紀後の大学は大きな発展を遂げていました。文学部には4学科しかなかったのが15専修と学問の領域が格段に広がり、有能な先生方が集まり、学生にとってはワクワクするような陣容になっていました。

先日神戸新聞の取材を受けましたが、その時の記者が文学部卒業だという。神戸にいると神大卒の同窓生に多く出会います。神大が神戸の地に根付き広がっていることを実感します。

文学部はオックスフォード大学と「神戸オックスフォード日本学プログラム」協定を締結し、毎年オックスフォードの学生を受け入れています。このように新しい挑戦と地道な研究で優秀な人材を、神戸をはじめ全世界に今後も送り続けていってほしいと願っています。



小豆島「二十四の瞳」の舞台になった岬の分教場の教室にて
2022.05.19 13:49

河野(児玉)房子 様

(英米文学専攻・1960年卒)

震災やコロナ禍を乗り越えて、神戸大学120周年誠におめでとうございます。

当時女子学生は極端に少なく、勉学では差別なく厳しく鍛えられましたが、部活では男社会の中で甘やかされ、お客様状態でした。デモにもいったしESSでは長崎や、菅平にも合宿でいきました。

毎年開学記念祭が盛んで私も茶道部の野点、御影混声合唱などで参加して楽しい思い出となっています。また、学部や学年を超えた読書会のメンバーでキッドさんやリビさんのお宅にもよくお邪魔しました。

卒業時には進学も就職もせず、キッドさんには「お皿を洗うために教えたのではない」と叱られましたが、与えられた環境の中で出来ることを精一杯社会にお返しするため努めてきたつもりです。これから的学生特に女子学生に望むことは、恵まれた時代になったと思いますので自由に自分の信じる道を進んでほしいと願っています。最後に、神戸大学もいろいろな学部が増えたのですからそろそろ‘商神’以外に第二の校歌が生まれるといいなと思っています。



愛媛大学 名誉教授

中村 保夫 様

(英米文学専攻・1959年卒)

当時、かつて旧制姫路高校の学舎であった神戸大学姫路分校での一年半の教養課程を終えた後、御影学舎での二年半が私にとっての専門課程での懐かしい学びの日々であった。姫路分校時代は、姫路市の郊外に住んでいたので、自宅から通える学び舎であった。しかし、神戸市の御影に学び舎が移つてからは、御着駅から黒煙を吐く蒸気機関車が牽引する列車に乗り三宮駅まで行き、そこから電車に乗り換えて住吉駅まで行き、更に歩いて10分程の御影学舎まで通ったものである。従って通学に片道約2時間は要したので、帰路をも計算すると4時間は費やしていたことになり、講義に出席する以外の余暇の時間はほとんどなかった。



神戸大学の創立は、1902(明治35)年の神戸高商設置に遡りますが、6学部を擁する新制神戸大学は1949(昭和24)年発足で、文理学部が改組され文学部が発足したのは1954(昭和29)年のことで、私たちが入学した1955(昭和30)年のわずか一年前に、文学部が発足していました。1956(昭和31)年10月より7回生は御影学舎で専門課程に進み、それぞれの専攻分野に分かれて本格的な専門分野での学びが始まったのです。

専門課程はわずか二年半でしたが、英米文学専攻に属した私たち22名の同級生は、極めて秀逸な錚々たる学者であられる先生方の良き薰陶を受け、とても楽しく、しかし極めて厳しく学問の真髄を学ぶことが出来ました。今思うと懐かしい個性豊かな先生方の面影が目に浮かび、愛惜の念を禁じ得ません。英文学の山本忠雄先生と工藤好美先生、英語学の神津東雄(はるお)先生、米文学の谷口陸男先生。厳しくも暖かく接してくださった人間味豊かな先生方に、遅まきながら心からの感謝とお礼を申し上げます。当時の懐かしい学窓の日々のことをあれこれ想い出すと、万感胸に迫る思いがします。

母校神戸大学は、来年創立120周年の記念すべき年を迎えるが、知性豊かな人間味溢れる優秀な人材を輩出する卓越した大学として、益々発展することを願ってやみません。(2021.11.11記す)

(次ページもご覧ください)

知・人・共創と協働



KOBE UNIVERSITY

「神戸大学創立120周年を祝って」

前ページにご寄稿の中村保夫様より、
御影学舎で学んだ7回生が師事した先生の一人、山本忠雄
教授の「こんな文を見つけました」とお送りいただきました。

「日々に疎し」

山本 忠雄(故人・1968年まで英米文学教授)

これは私のことで自戒の語である。関西に在住しているので、京都と神戸に集まつた時、出席したことはあるが、健康が不安なので、いつも東京のフェロウシップには遠のいている。フェロウシップの会に出ないのは、フェロウシップの資格を欠くわけだし、殊に楽しみな懇親パーティには、一度も顔を出した覚えはないので、去る者は日々に疎くなるばかりだ。

私は平生から附き合いがわるく、たまの会合に加わるのを何よりも好み、特にビール・パーティのようなくつろいだ会には、喜んで仲間入りするのが常であつたのに、健康のためとはいえ、みすみす折角のパーティを断念するのが常となつたのは、千載の恨事と称すべく、賑やかな会合を誰よりも楽しんだディケンズにも申し訳のない次第で、この通俗的な小説家の愛読者をもつて任じている私としては、何ともやり切れない気持である。

ジョンソン博士は「暇な時は独りで居るな、独りの時は暇で居るな」と戒めている。暇な時も独りでいるしか仕方のない私は、独りの時は暇もなく、今でもディケンズを読みつづけている。英語や英文学に親し

む自信はこれで保たれる。独りでいても淋しくないのはこのせいで。その割に研究らしい研究も一向に抄取らず、宿題がいつまでも宿題で残っているのが、通俗的な読者たる所以で、この点は誰よりもフェロウシップの一員たる資格を具えていると自負している。

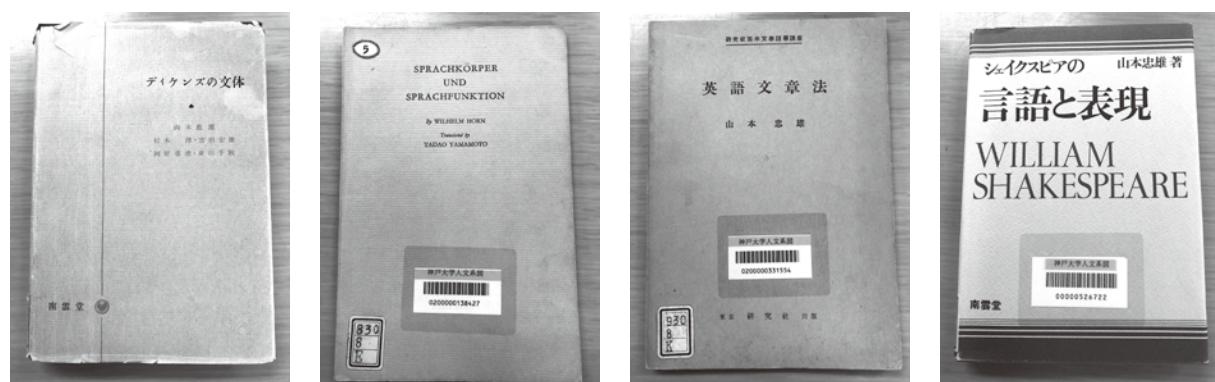
他の学会などにも疎くなり、会費の払い込みがおくれたため、除名された学会もある。フェロウシップに限つて、そんな運命は免れたい。フェロウシップが其処にあり、自分もそれに加わっているだけで、ディケンズを身近に感じる功徳があるからだ。

(ディケンズ・フェロウシップ 第4号、1981年、より引用)

山本忠雄教授

(1904年12月1日 - 1991年7月28日)

1928年、東京帝国大学英語英文科卒。広島高等師範学校教授、広島文理科大学(のち広島大学)教授。1946年「Growth and system of the language of Dickens : an introduction to a Dickens lexicon」で東大文学博士、同論文で1953年日本学士院賞受賞。神戸大学教授、1968年定年退任、大谷女子大学教授。



山本忠雄先生のご著書より(文学部:人文科学図書館収蔵)



神戸大学創立120周年記念事業 キヤッチフレーズとロゴマーク決定

神戸大学は、1902(明治35)年に高等教育機関として設置された神戸高等商業学校を基盤として創立。今年120周年を迎えます。

神戸大学は創立120年を超えて、新しい時代を見据えた「傑出する"知"を創る」「卓越する"人材"を創る」こと、加えて社会の発展に貢献することを使命とし、"異分野共創研究教育グローバル拠点"の実現を目指しています。

その方向性を表す「知・人・共創と協働」のキヤッチフレーズは、創立120周年を記念して学内の教職員・学生から公募し、選考等の結果、決定されたものです。

神戸大学120周年記念の行事等については下記特設サイトをご覧ください。

<https://www.kobe-u.ac.jp/120th/>

*創立120周年記念募金(2024年3月31日まで)は特設サイトでご案内しています。

*記念式典:山中伸弥氏ご講演(12月25日)は、本誌の裏表紙でご紹介しています。

KU—NETへの卒業生からのメッセージ(投稿原稿)

奈良県庁勤務

佐藤 和真 様

(美術史学専攻・2019年卒)

1. 在学中について

・**文学部**: 文学部に入学したのは歴史や美術に興味があったからです。美術史学を専攻し、在学中は全国の寺社や美術館等に足を運びました。研究室の同期や先輩と行った、イタリア旅行や中国旅行はとても充実していました。同じことに関心を持ち、語り合える仲間が出来たのがとても良かったと感じます。

・**クラブ活動** : 神戸大学オリエンテーリングクラブ(神大OLK)に所属していました。オリエンテーリングとは、公園や森で、地図とコンパスを頼りに、あらかじめ決められたチェックポイントを回るタイムを競う競技です。大学から何か新しいスポーツを始めてみたいと思い、入部しました。夏休みの合宿や年2回の全国大会(インカレ)はとても良い思い出です。オリエンテーリングは生涯スポーツとして幅広い年齢層が楽しめるスポーツであり、私自身、卒業後も大会に参加しています。大会に参加し、競技はもちろんですが、クラブの先輩や同期、後輩に会うのも楽しいです。また、卒業後に入部した部員とも交流があり、クラブの発展や後輩の頑張りを見られるのが嬉しいです。

2. 卒業後について

・**神大に入学して良かったこと** : 神戸大学に入学して

良かったことは、六甲という街で4年間過ごせたことでしょうか。思い出補正があるかもしれません、六甲はとても良い街だと思います。現在は奈良県在住ですが、今でも六甲に住みたいと日々考えています。

・**就活の苦労** : 公務員試験では、経済や法律を勉強する必要がありますが、それまで全く触れたことのない分野なので初めは苦労しました。ただ、今になって思えば、知識や視野を広げることができた良かったとも思います。

・**就職前とのギャップ** : 忙しいとは聞いていましたが、思っていたより忙しいです。

・**仕事の面白い部分** : 日常生活に役立っていることを実感できるのが面白い点です。土木という分野は、道路、河川など生活に直結する身近なものであるため、街中や出かけた先で、自分の仕事との関わりを発見できることが面白いと感じます。

3. 在学生にひとこと

私自身、社会人としてはまだまだ新米ですが、なんとか楽しくやっています。学生の時にしか出来ないこともありますが、社会人になってから楽しめるようになることが多いと感じています。ぜひ仲間を大切にして、前向きに学生生活を送ってください。

「ブンヤ」が伝えられること

赤羽 佳奈子

信濃毎日新聞株式会社 諏訪支社
(国文学専修・2018年卒)

新聞記者は「ブンヤ」と呼ばれる。卒業生にマスコミ業界の先輩もいらっしゃる中で恐縮だが、業界に詳しくないまま入社した私は初め、文章を売る「文屋」なのかと思っていた。先輩方に聞いてみると「新聞」のブンだらうということで、少しがつかりした記憶がある。それでも「文を売る仕事」というのは面白いなと思っているので、引き続き勝手に「文屋」だと思うことにしている。

入社してちょうど5年目となり、1年目のときによく分からぬまま先輩の姿を見ていた参院選や県知事選も2周目を迎えた。あまり大きな声では言えないが、学生時代は政治にほとんど関心がなく、選挙に関する知識も高校や大学の一般教養で勉強した程度。選挙権が20歳から18歳に引き下げられたのは、私が19歳のときだったと記憶しているが、タイミングもあり、初めて投票をしたのは結局20歳を超えてからだった。

選挙のときは、担当自治体での情勢を調べたり、住民の選挙に対する意識を取材したりする。しかし、候補者を担当しない選挙はなんとなく他人事で、忙しそうに働く先輩たちの姿をガラス1枚隔てた気分で見ていた。

昨年、担当する町での町長選挙があり、初めて出馬から当選までを担当した。他人事の気分が一変。近隣自治体では首長の無投票当選が続いていたため、候補者が2人になった時には久しぶりの選挙戦に少なからず関心が集まった。

選挙の頃は、私が町を担当し始めて1年と数ヶ月のタイミングだった。それでも選挙への関心を持つてもらうため、町に何十年も住んでいる人が納得できるような記事を書かなければならぬ。普段以上に説得力のある記事を書かなければとの緊張感があった。一方、片方の候補者の主張に偏らないように、公平な記事にすることも重要だった。企画で町政課題を指摘する記事を書いた際には、昔からの町民や移住者、企業経営者など、さまざまな立場の老若男女に話を聞いた。



候補者の主張や公約には、地域を今よりもっと良くしたいという思いが詰まっている。町の課題をどう捉えるか、候補者間で共通する政策もあれば、同じ課題に対して違う取り組みを提案する政策もある。一方、ある候補者は課題と捉えていても、他の候補者は課題と考えていないこともある。選挙戦で議論になったことで地域住民の関心が高まった課題もあった。議論をきっかけに選挙後に新たな施策が生まれたり、条例が改正されたりする場面を見守り、投票行動に限らず、選挙による議論自体が自治体を変える機会になるのだと感じた。選挙取材の「当事者」となることで、「選挙戦を担当して初めて地域のことが分かる」と先輩方に言われていた意味を実感した瞬間だった。

選挙が近づくと、主権者教育をしている教育現場に取材に行くこともある。昨年の衆院選の際、中学生が新聞で公約を見比べて模擬投票する場面を取材した。各政党の公約を一生懸命読み込む生徒たちを見て、政治に関心のなかった学生時代を思い出して反省した。

若者に限らず、投票率は年々減少傾向にある。学生時代の自分のように、選挙や政治は遠いものと思っている人に、もっと身近に感じてもらうにはどうしたらいいのか。

普段の取材には快く対応してくださるが、選挙や政治の話題になると「よく分からない」「自分の意見を答えるのは抵抗がある」という人も少なくない。新聞にできることを考えてみるが、そもそもSNSが情報収集の主流になった現代において、新聞 자체を身近に感じてもらえていないのではないか、という不安もある。そして、「選挙に行けば地域が変わる」「国が変わる」と言われただけで当事者意識を持てるかと言われると疑問が残る。

なぜ選挙に行かなければいけないのか、そしてそれをどのように伝えるのか、考えなければならないことは多い。記者になったことで、国や県、市町村で、毎年何らかの選挙があることを改めて知った。これだけ機会があるのだから、さまざまな立場の人に話を聞き、一緒に考えていきたい。まずは身近な地域の話題や生活の話題を結びつけるところから始めようと構想している。

伝わる文章を書くことは難しい。そもそも読んでもらえなければ伝えられないし、読んでも伝わらないこともある。事実を伝えることはもちろんだが、取材相手や読者と一緒に考えていくことで、少しでも何かを感じてもらえる文章を書きたいと思っている。何かと忙しい日々の中で読んでくださる人に、心に残る何かを届けられる「ブンヤ」を目指したい。

〔研究室だより：社会学〕

創発的な「社会」を分析すること

佐々木 祐

(人文学研究科社会学研究室・准教授)

2020年3月、新型コロナウイルス感染症のため自主隔離中だったボリス・ジョンソン英首相が、国民へのビデオメッセージの中で「社会というものが実際に存在している」("There really is such a thing as society")と発言したことが世界的にも注目を集めました。もちろんこれは、1987年のマーガレット・サッチャー元首相による「社会などいうものは存在しない」("There is no such thing as society")という、新自由主義の「マントラ」を意識してのものです。教育・健康を含めたさまざまな公共財だけでなく、社会関係や人間性さえもが「民営化/私有化」されようとしているこの世界にあってもなお、そこに利益や効率とは別の論理と倫理で機能する「社会というもの」が(辛うじて)息づいていること。全世界的なパンデミックが皮肉にも浮き彫りにしたのは、この事実だったわけです。

「社会」を、創発的な特性を有する「一種独特の実在」とみなしたのは、社会学の創始者の一人であるエミール・デュルケムですが、(それに関する批判や見解についてはここでは深入りしないこととして)個人と個人の単なる集合には帰すことのできない、ある機能や構造を有した「なにか」が確かに存在していることに、私たちはコロナ禍のなかで日々気付かされてきました。そうした「なにか」の持つ力や作用、またその中で創造され展開される人や集団の振る舞いや関係性に触れながら、実証的かつ理論的な分析に取り組むのが社会学という営為です。

2013年に退職された佐々木衛先生の後任として、私が本研究室に赴任したのは同年の10月でした。当時は油井清光先生(アメリカ社会学理論・現代社会論)と藤井勝先生(経験社会学・東南アジア地域研究)もご在職中で(とはいえ、研究科長や理事・副学長、学長補佐や国際交流などで非常にお忙しくされていましたが)、白鳥義彦先生(フランス社会学理論・教育社会学)、平井晶子先生(家族社会学・歴史人口学)とともに、「社会」の示す多様な相貌を解析する作業の一端に加わることができたのをたいへん嬉しく思いました。私自身の中心的な研究テ



ーマは中米／メキシコでの人的移動であり、またどちらかというと人類学的な発想によるところも大きかったため、やや場違いな感もありましたが、まあそれぐらいの「外れ値」(外道?)を包摂するぐらいの度量が社会学研究室にはあるということなのでしょう。なお、油井・藤井両先生は2019年に退職され、後任に酒井朋子先生(紛争研究:2022年転出)、また昨年度からは梅村麦生先生(ドイツ社会学理論・時間研究)が着任され、現在は4名体制で教育・研究にあたっています。

もちろん、2020年からの急激な社会変容に本研究室も翻弄され続けています。対面での実施調査を中心とする「社会調査演習」はもとより、少人数による濃密な議論によって成立するゼミ・講読科目までも、実施形態の根本的な変更を余儀なくされました。また、卒業論文・修士論文作成にあたっても、予定していた聞き取り調査の中止や、各種資料・研究会へのアクセス制限など、研究方法そのものをその都度模索しながらの試行錯誤が続いていました。とはいえ、教員・職員・院生学生相互の協力と創意工夫によって、こうした種々の困難はなんとか乗り越えられつつあるようです。2020・2021年度に提出された論文をみても、それまでのものと内容的には勝るとも劣らないばかりか、課せられた制約をかえって有利に利用しながら遂行された研究もあったほどでした。もちろんそれは個々人の努力の成果であつただけでなく、社会学研究室という場の持っている力によるところも大きかったと考えています。

こうした状況のもとにあって、新しい取り組みも始まっています。例えば、研究室がこれまで実施してきた兵庫県北部・但馬地域調査を背景に、2019年度より豊岡市と共同での外国人住民調査が開始されました。市の全面的な協力を得て、大規模な量的調査と詳細な聞き取りや参与観察を組み合わせ、生活者としての外国人住民たちの暮らしや労働、子育てや教育について包括的な分析と提言を行うことができました。その成果については2冊の報告書などの形で豊岡市ホームページにて公開するとともに、現在論集として公刊する準備を進めています。感染状況を見ながらの綱渡りの調査ではありましたが、研究室メンバーだけでなく、現地の当事者の方々との共同的な作業によってもたらされた「なにか」がここにも現れているはずです。

今後私たちをめぐる状況はさらに激しく変化していくことでしょう。だがその中で、「社会」の示す力や創造性に注意しながら現実に対応していくこと、それは私たちの共同的な「人間らしさ」を護り伸長させていくためには不可欠の作業だと思われます。

2022年度 文学部新入生歓迎 茶話会

5月18日(水)

第1部:15:10~15:40 B331教室

第2部:15:45~17:00 各専修の部屋

感染予防のために、従来のようなティーパーティー形式を自粛して、めいめいにはお茶とお菓子を持ち帰ってもらう、ちょっぴり寂しいスタイルでしたが、対面による実施の機会を持てただけでも良しとすべきでしょう。まずは長坂一郎文学部長と吉田浩次文窓会副会長の挨拶に続き、「文窓賞」募集案内、各専修の教員からの挨拶で第1部は終了。第2部では新入生たちは入退室自由な各専修の部屋を思い思いに行き来して、教員や学生、院生への質問や対話をする充実した時間を持ちました。



Kobe-Oxford Japanese Studies Program; KOJSP

「神戸オックスフォード日本学プログラム」第10期生の修了発表会

2022年8月4日(木) 会場:神戸大学瀧川記念学術交流会館大会議室

13:30~ 修了発表会、 17:00~ 修了式

今回は3年ぶりで対面での KOJSP 10周年の修了発表会が開催される予定でした。直前になり KOJSP 留学生の中に1名の感染者が発生し、濃厚接触者も4名いることが分かり、対面とオンラインのハイブリッドで行われることになりました。文窓会からも対面での出席は遠慮し、ZOOM で武藤美也子文窓会会長がお祝いの挨拶をさせていただきました。

オックスフォード大学東洋学部日本学専攻の2年生全員を、神戸大学文学部において1年間受け入れるプログラム・KOJSP も今回第10期生13名が無事修了。全員コロナ禍のため来日が間に合わず、昨年10月1日よりオンライン留学という形で開始した中には、フランス、ポーランド、ルーマニアなどからの留学生の姿も。右の写真と文は林 由華助教(KOJSP 担当)による紹介です。



教室で:5月11日に行われたKOJSP生のオリエンテーション。今期はKOJSP全員が日本に入国したのが4月3週目ごろで、全員が落ち着いたゴールデンウィーク後に対面オリエンテーションすることになりました。参加者はKOJSP生10期生12名(1名欠席)、そのチューターと指導教員、AB委員です。



原爆ドーム前で:今期は6月3日~5日の日程で広島でグローバルアカティブラーニングの授業(平和学習)を実施。コロナ禍の影響で参加人数を絞っており、KOJSP生13名、それ以外の留学生1名、日本人学生3名、教員3名で行きました。広島の人たちと一緒に平和記念資料館、平和記念公園を見学し、ワークショップに参加して意見交換。みな非常に積極的に参加し、真剣に議論してくれました。

●文窓会より:新しい仲間(役員)と事務所開設のお知らせ

2022年度から新役員の方が2名加わってくださいました。中川伸子さんと梅村麦生先生です。梅村先生は自己紹介をかねてこの会報に投稿してくれています。一番若い役員で会にエネルギーを注入してくれるでしょう。HPを担当してくれます。中川伸子さんは武藤のかつての勤務先「神戸女子短期大学」の同僚でとても能力のある方です。文窓会も二人を迎えて充実しております。

また4月から文窓会事務所にアルバイトの方を受け入れることができました。週に1日だけですが、毎週水曜日11時から16時まで、B館1階の一一番西の文窓会の部屋が開いています。気軽に部屋を訪ねてください。アルバイトの方は山本陽子さんというとても感じの良い有能な方です。

(文責:武藤)

文窓会（文学部同窓会）——会計報告——

令和3年度収支計算書（令和3年4月1日～令和4年3月31日）

【収入の部】前年度繰越金	¥19,843,496
今年度収入合計	¥5,007,433
会費納入金	4,320,000
協力金	686,000
受取利息	1,433
収入合計	¥24,850,929
【支出の部】今年度支出合計	¥3,194,824
事業活動費	¥2,176,617
会報費	1,326,785
歓送迎会費用	576,400
文窓賞費	114,414
ホームページ管理費	29,850
総会費	13,168
活動援助費	50,000
名簿管理費	66,000
協力金費	¥130,000
学友会費	110,000
学祭援助費	20,000
事務局費	¥838,168
事務業務委託報酬	600,000
家賃・水道光熱費	105,646
通信費	100,578
旅費交通費	19,980
消耗品費	11,964
支払手数料（振込・振替料金）	¥49,791
会議費	¥0
租税公課	¥248
次年度繰越金	¥21,656,105
支出合計	¥24,850,929
（今年度収支）	(+) ¥1,812,609

令和3年度財産目録（令和4年3月31日現在）

I . 資産の部	¥21,658,145
（池田泉州銀行）普通預金	111
（みなど銀行）普通預金	9,359
現金	90,012
（ゆうちょ銀行）普通貯金	504,922
（みなど銀行）定期預金	1,007,159
（みなど銀行）定期預金	1,510,257
（ゆうちょ銀行）振替口座	4,465,095
（ゆうちょ銀行）定期貯金	6,002,352
（みなど銀行）定期預金	8,065,878
未収金	3,000
II . 負債の部	¥2,040
未払金	2,040
III . 正味財産合計	¥21,656,105

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、
適正であることを認めます。

令和4年5月12日
会計監査 花木直彦 印

文窓会役員（2022年9月末現在）

会長	武藤 美也子	1968年卒・国文学
副会長	吉田 浩次	1968年卒・社会学
	西川 京子	1969年卒・西洋史学
幹事長	廣野 幸夫	1968年卒・社会学
常任幹事	日高 健一	1961年卒・芸術学
	田中 瞳子	1970年卒・芸術学
	中川 伸子	1992年卒・哲学
	中畠 寛之	2001年修・フランス文学
	梅村 麦生	2009年卒・社会学
	津田 薫	2010年卒・フランス文学
会計監査	花木 直彦	1961年卒・国史学
	三宅 征彦	1966年卒・社会学
東京支部長	中野 裕	1961年卒・英米文学
東京副支部長	田中 勉	1972年卒・国文学

文窓会東京支部だより

2019年4月25日に第14回文窓会東京支部総会を開催、15名の参加を得たあと、コロナ禍の影響で開催中止が続きました。このたび、東京六甲クラブの会場も整いはじめ、各学部に木曜会の開催の準備をするようにとの要請もあり、次の東京支部総会並びに從来通り「木曜会」を開催したいと思います。期近になりました際には、皆さんに案内をお送りするようにいたします。

1.開催予定日：2022年11月21日(月)

2.当日の予定：

1)昼食を挟んで文窓会総会開催

2)木曜会開催（Zoomによる講演）

　　講師：神戸大学大学院人文学研究科教授 古市 晃先生

　　講演内容：「倭国の時代」（12月9日Zoom講演）に続く「飛鳥の時代」の時代背景（別途通知します）。

　　※古市先生には、2013年10月、六甲クラブでの木曜会で「聖徳太子の虚像と実像」で講演いただきました。

3)木曜会終了後：茶話会

Remarks) 文窓会の情報及び東京六甲クラブの情報は、その都度、「文窓会東京」のメル友の方々にお送りしています。

「文窓会東京」のメル友への登録は、下記までお願い致します。

文窓会東京支部連絡先：支部長 中野 裕（ゆたか）

〒223-0064 横浜市港北区下田町1-1-1-113

TEL&Fax: 045-561-6317

Eメールアドレス: y.nakano.1938-panda@d9.dion.ne.jp

振り返れば六甲の山並み～あの頃の友に会いたい

第16回 神戸大学&文学部ホームカミングデイ2022 — Kobe University Homecoming Day 2022 —

10/
29
土

神戸大学ホームカミングデイ2022

※詳しくは 下記のホームページをご覧ください。

[第16回 神戸大学 ホームカミングデイ](#) 検索

10:30～記念式典/出光佐三記念六甲台講堂(登録有形文化財)

講演:島本久美子氏/Google 合同会社、Director 1991年経済学部卒)
(You Tubeによるライブ配信予定)

文学部ホームカミングデイ2022 対面&オンライン開催

今年度の文学部ホームカミングデイは、新型コロナウイルス感染症の感染状況を踏まえ、**対面形式及びウェブ会議システム「Zoom」を利用したオンラインとのハイブリッド形式**で開催いたします。来学が難しい皆様におかれましては、是非オンライン形式でご参加ください。

13:30～13:40 開会挨拶、文学部長挨拶

13:40～15:00 教員による講演

「1968年のチェコスロvakia事件とウクライナ」

藤澤潤 准教授

15:00～15:20 学生によるスピーチ

15:30～16:00 第16回文窓賞授賞式

16:00～16:20 文窓会総会

【オンライン形式の参加方法】

開催前日の**10月29日(金)**にZoomのリンクを掲載しますので、当日は、

開始時間になりましたら、リンクをクリックして、各自ご参加ください。

事前の申し込みは不要です。

* 詳しい情報は文学部ホームページでご案内しています。



お問い合わせ先

神戸大学大学院 人文学研究科 総務係
〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 TEL 078-803-5591 FAX 078-803-5589
E-mail : lsoumu@lit.kobe-u.ac.jp (lは小文字のエルです・@は半角に置き換えてください)
<平日8:30～17:15／土日祝を除く>

講演「1968年のチェコスロvakia事件とウクライナ」 藤澤潤 准教授

2014年東京大学大学院人文社会系研究科単位取得退学。2018年博士(文学)(東京大学)。2017年神戸大学文学部特命講師。専門分野は冷戦期のソ連と東欧諸国の相互関係。主な著書は、『ソ連のコメコン政策と冷戦 エネルギー資源問題とグローバル化』

神戸大学創立120周年記念 講演

知・人・共創と協働



講師:山中伸弥氏

山中氏は1987年(昭和62年) 神戸大学医学部卒、
2012年(平成24年)iPS細胞(人工多能性幹細胞)
作製でノーベル生理学・医学賞を受賞されました。

●開催 2022年12月25日(日)

●会場 ポートピアホテル

* 当日はYouTubeでの動画配信を予定しています

* 詳細はWebで「神戸大学120周年記念 特設サイト」を検索してください。